

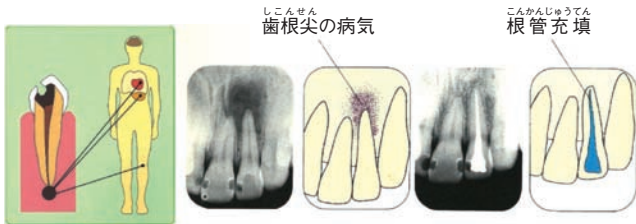


歯医者さんが教える 歯と口腔の健康管理

〔第17回〕 全身疾患と口腔症状について

監修／歯学博士 鹿島 健司

歯周病のように口腔の病気が全身に影響を及ぼすことは、以前（第13回）お話ししましたが、全身疾患の症状が口腔に現れることもしばしば見られます。皮膚疾患である掌蹠膿疱症（しょうせきのうほうしょう）は扁桃や歯根の病巣感染による細菌アレルギー、歯科の詰めものやアクセサリによる金属アレルギー等によって生じるといわれ、膿が溜まった膿疱と呼ばれる皮疹が手のひら（手掌）や足の裏（足蹠）に数多くみられる疾患です（写真1）。多くは難知性で、周期的に良くなったり、悪くなったりを繰り返します。歯根の治療をしたり、金属を除去したりすることで軽快するケースも多く経験します。



歯が原因の病巣感染と歯根治療のレントゲン写真

歯の神経が死んで根の先端に膿が溜まってしまうと、その膿の中の細菌の毒素が全身のいろいろな所に影響を及ぼすと言われてます。自覚症状がないものが多いのですが、上のレントゲン写真のようにキチンと治療（根管充填）されることで、根の先の病巣も治癒します。

また、全身の病気が口腔に発現する主なものとして血液疾患があり、これには白血病や紫斑病、貧血、悪性リンパ腫といったものが挙げられます。これらは初期に口腔症状が現れることがあり、特に、血液のガンとも言われている白血病の場合、初発症状として15～20%が歯肉からの出血が認められると言われてます（写真2）。



写真1 掌蹠膿疱症

写真2 白血病による歯肉

先日、以前から通院している患者さんが、“朝起きたら口の中の粘膜や唇に血の塊ができて、手に蕁麻疹ができた”

と言って来院されました。頬の粘膜や舌、唇に血腫ができていて、左右の手の甲には蕁麻疹のような赤い斑点ができていました。

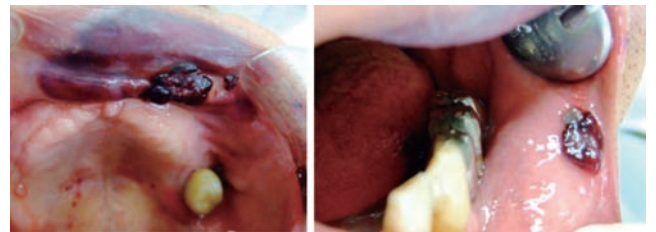


写真3 下の口唇に血腫がみられる（2枚とも）



写真4

手の甲に蕁麻疹のような赤い斑点

これは特発性血小板減少性紫斑病という病気で、特に原因もなく血小板数が減少（正常は12～28万個/?）して、歯肉や口腔粘膜出血、皮膚の出血斑、鼻血等がみられます。このケースでは血小板が数千にまで極端に減少していました。蕁麻疹と思われた手の赤い斑点は皮下出血によるものでした。血液内科にてステロイドの投与と血小板輸血を行ない、3週間の入院加療を受けました。

また、5歳の女の子で周期的に歯肉が腫れて口内炎ができるという症例に出会ったことがあります。周期性好中球減少症という病気で、約21日周期で好中球の減少が起こり、その時期に一致して発熱、歯肉の腫脹発赤、口内炎がみられるのが特徴です。幸いにも軽症であったため、口腔ケアを徹底し、経過観察を行なったところ、一時的な症状として自然軽快がみられました。



周期性好中球減少症が疑われたケース

監修／鹿島健司（歯学博士）。1958年1月3日生。かしま歯科医院院長。日本先進インプラント医療学会評議員・指導医・専門医